

「大学院オペラ」の喜び

磯山 雅 (国立音楽大学教授)

国立音楽大学が毎年10月に開催している、「大学院オペラ」。最近はお客増え、時には満席止めになるほどなので、体験された方も多かろうと思う。「大学院オペラ」の場合、キャストとして出演するのは、大学院修士課程オペラ専攻の2年生である。そこに何人か、歌曲専攻の学生と卒業生(「助演」と呼ばれる)が加わる。オーケストラは基本的に学部学生であるが、教員と卒業生によって補強されている。

なあんだ学生か、というレベルではけっしてないことは、あらためて述べるまでもあるまい。伸び盛りの若者が、おびたしい時間をかけて準備し、作ってゆくのが、「大学院オペラ」である。モーツァルトの名作でステージに上がれることの喜びは大きく、彼らは例外なく盛んな意気込みで、役作りに取り組む。声楽の先生、指揮者、演出家の指導も、長期にわたり、厳しく行われる。その過程で多くの人が、一段も二段もレベルを上がって、新人のオペラ歌手になってゆくのである。国立音楽大学の大学院を出てオペラ界で活躍している歌手は数多いが、彼らの今日を作っているのは「大学院オペラ」における経験だと言っても、過言ではないであろう。

「大学院オペラ」で取り上げられる曲目は、たいていモーツァルトの名作から選ばれる。基礎的な勉強にはモーツァルトが一番いい、という教育的な判断からだ。が、いつしかそれが、大学の伝統となった。今年取り上げられるのは、《コシ・ファン・トゥッテ》(女はみんなこうしたもの) K.588である。このオペラは二重唱が多く、アンサンブル能力の学習のためには最適の作品である。オペラというと、演奏する側も鑑賞する側も

アリアに目を向けがちであるが、真の感動はむしろ、アンサンブル楽曲にあることが少なくない。アンサンブルを大切に感性を磨くことは、将来のオペラ歌手のためにきわめて大切であると、私は思っている。

《コシ・ファン・トゥッテ》は、明るく快活な喜劇である。女性が心変わりするかどうかを確かめようとして男たちの行くあの手この手の求愛を、モーツァルトは、情熱も涙もひっくるめて、軽妙なタッチで描き出してゆく。だが、偽りの感情にはいつしか、真実が入り込んでくる。言い換えれば、冗談めかした設定のもとで、モーツァルトはいつのまにか、日常を超えるほどの熱烈な愛を追求している。その結果として、モーツァルトが愛を歌いあげる最高のページを、この《コシ・ファン・トゥッテ》は含むことになった。それはフィナーレの直前に置かれた、フィオルディリージ(ソプラノ)とフェルランド(テノール)の二重唱である。この二重唱に込められた灼熱の愛の感動には、《魔笛》のより抜きのページといえども及ばないのではないかと、私には思われる。

この《コシ・ファン・トゥッテ》に取り組む機会にとりわけ恵まれたのが、今年大学院生である。彼らは、3月にはサントリーホール「ホールオペラ」に合唱で出演し、国立音楽大学講堂とサントリーホールにおける公演で、経験を積むことができた。また6月には、サントリーホール/ブルーローズにおける「レインボウ21」に、木管アンサンブルの共演で《コシ》抜粋を披露した。それだけに今年「大学院オペラ」は、例年を超える成果を収められるのではないかと期待される。皆様のご支援を切にお願いする次第である。



指揮
増田宏昭 Masuda, Hiroaki

東京藝術大学でピアノと指揮を学び、文化庁派遣芸術家在外研修員海外派遣員として渡独。バイエルン国立歌劇場にてサヴァリッシュ、パタネー、クライバーの下で研鑽を積む。1985年にドイツ・コブレンツ市立歌劇場指揮者、87年に同歌劇場首席指揮者に就任。同時にライニツシュ・フィルハーモニー客演指揮者に迎えられ、コブレンツ市より名誉市民賞を受賞。93年からドイツ・ザールラント州立歌劇場首席指揮者兼音楽監督代理に就任。98年には、同歌劇場管弦楽団とともに来日、東京オペラシティと鎌倉芸術館で行った凱旋公演「さまよえるオランダ人」は稀代の名演と評され、大成功を取った。2002年からは、ノルトハウゼン歌劇場ならびにLOHオーケストラ・ゾンダースハウゼンの音楽総監督に同時就任。日本国内では、二期会オペラ、首都オペラなど、数多く出演。2000年には「夕鶴」を振って新国立劇場デビューを果たした。現在ドイツ、イタリア、中国、台湾などで活躍している。



演出
中村敬一 Nakamura, Keichi

オペラ演出家。1957年東京に生まれる。はじめ、武蔵野音楽大学同大学院で声楽を専攻、卒業後、舞台監督集団「ザ・スタッフ」に所属してオペラスタッフとして活躍。以後、鈴木敬一、栗山昌良、三谷礼二、西澤敬一各氏のアシスタントとして演出の研鑽を積む。89年より、文化庁派遣在外研修員として、ウィーン国立歌劇場にて、オペラ演出を研修。帰国後、リメイク版「フィガロの結婚」、二期会公演「ドン・ジョヴァンニ」「ボッペアの戴冠」で、高い評価を得、続く二期会公演「三部作」、東京室内歌劇場公演「ヒロシマのオルフェ」、日生劇場公演「笠地蔵・北風と太陽」で、演出力が絶賛され、95年ジローオペラ新人賞を受賞する。また、2000年には新国立劇場デビューとなった「沈黙」が、高く評価された。01年ザ・カレッジ・オペラハウス公演「ヒロシマのオルフェ」で大阪舞台芸術奨励賞を受賞。また、オペラの台本も手がけ、02年国民文化祭鳥取で宮沢賢治原作、新倉健作曲「ポラーノの広場」の台本と演出を担当し高評を得ている。音楽的な視点と豊かな感性による舞台づくりは広く認められ、また若い声楽家の指導、オペラの普及に尽力している。国立音楽大学客員教授、大阪音楽大学、大阪教育大学講師。

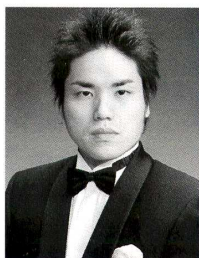
16日



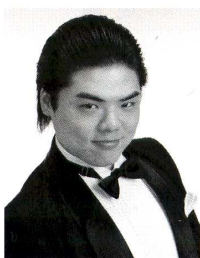
フィオルディリージ
大武彩子



ドラペッラ
大槻朱里



グリエルモ
照屋博史



フェルランド
碓氷昂之朗



デスピーナ
清野友香莉



ドン・アルフォンソ
千葉祐也

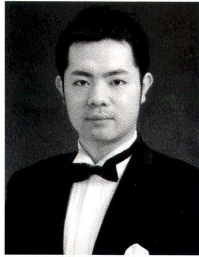
17日



フィオルディリージ
安田祥子



ドラペッラ
鈴木 望



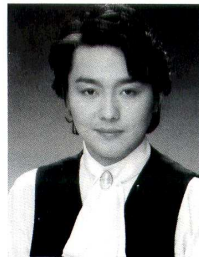
グリエルモ
大川 博



フェルランド
小堀勇介



デスピーナ
三井清夏



ドン・アルフォンソ
北川辰彦